

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

## 日本語学校における中国人留学生と異文化適応

著者	丁 思?, 松田 英子
著者別名	DING Siqu, MATSUDA Eiko
雑誌名	東洋大学大学院紀要
巻	55
ページ	1-8
発行年	2019-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00010598/">http://id.nii.ac.jp/1060/00010598/</a>

# 日本語学校における中国人留学生と異文化適応

社会学研究科社会心理学専攻博士前期課程1年

丁 思琦

東洋大学社会学部社会心理学科

松田 英子

## 要旨

2008年に文部科学省が留学生に対する政策を改正後、従来の「就学生」と「留学生」の在留資格が2010年に一本化され、全員が留学生となった。近年の経済発展の影響を受け、日本語学校に在籍している留学生に占める中国人の比率は平成29年まで続けて一位となっている（日本語教育振興学会，2017）。在日中国人留学生数は年々増加しているが、一方で中国人留学生の日本文化への適応支援は十分ではない。来日初期のカルチャーショックを乗り越えられず、最終的に適応できないケースも多い。日本における入学試験を乗り越え、大学等に在籍すれば各種の支援を受けやすいが、進路が決まるまでの不安定な状況にある日本語学校の支援策は相対的に十分でない。村瀬・村瀬・北島・山内（1996）の調査では、日本語学校に在籍する中国人就学生は、大学に在籍する中国人留学生よりも有意に高く抑うつ状態を認めた。

このような背景を受け、本論文では、従来の中国人留学生を対象とした異文化適応に関する先行研究を整理検討し、日本語学校の中国人留学生を対象とした異文化適応とその課題について、議論した。

キーワード：日本語学校、異文化適応、異文化ストレス、中国人留学生、抑うつ、ソーシャルサポート

## 1. 中国人留学生の受け入れをめぐる日本の動向

日本を世界により開かれた国として、アジア、世界の中のヒト・モノ・カネ、情報の流れを拡大することは「グローバル戦略」を展開する重要な一環となっている。2008年に文部科学省は、2020年を目途に30万人の留学生受け入れを目指すという「留学生30万人計画」を打

ち出した。2017年5月1日現在では、留学生数26万7千人あまりとなっている（日本学生支援機構，2017）。2013年以降在日留学生が増加している背景には、日本は留学生に対しての受け入れ策を変更し、2010年に「留学」と「就学」在留資格を「留学生」に一本化したことの影響がある。2010年7月より以前は、在留資格は留学（大学等高等教育機関で教育を受ける活動）と就学（高等学校，専修学校の一般課程や高等課程及び各種学校等において教育を受ける活動）に分類されていた。一本化後の留学生のうち在日中国人留学生は10万7千人と、全体の40.2%を占めて第一位である（日本学生支援機構，2018）。また、日本語学校に通っている留学生においても、中国出身の留学生の比率は平成28年まで続けて第一位となっている（日本語教育振興学会『日本語教育機関の調査・統計データ』，2017）。このように中国人留学生が多い要因の一つとして、近年の中国の著しい経済発展の恩恵も考えられる。留学生数は増加したものの、在日外国人学生は留学生活上で様々な困難を体験しており、現在の日本社会の留学生の受け入れ体制が十分ではないことが指摘されている。

## 2. カルチャーショックと異文化適応

このように在日の留学生は急増しているが、留学後の適応が容易になったためではない。留学とは、単に勉強や生活をする場所が変わるということではない。思い描いていた留学生活と合致しない、カルチャーショックを乗り越えて適応することができない、すなわち異文化ストレス過多に陥るケースが多いのが現実である。

例えば、異文化体験者（移住者，留学生など）は、日常生活の中でストレスを体験することが、精神的健康に望ましくない影響を及ぼしていることが古くからアメリカや日本で実証されている（Kuo, 1976；松本，1999）。具体的には、言語，修学，経済，人間関係，生活，健康の領域での影響である（伊藤・井上，1998）。稲村(1980)は、留学生がこれまで慣れ親しんできたソーシャルネットワークから離脱することに伴って、身体的，心理的な病気が増加したり，不適応を起こしたりすることを示唆している。特に異文化適応の初期段階にいる日本語学校の留学生は，大学・大学院に在籍している留学生と比べ，来日後の期間が短く，日本語能力も高くないゆえ，日本社会での生活面で非常に困難な状況に遭遇している。

日本語学校で学ぶ中国人留学生を対象にした，異文化体験におけるアイデンティティの形成について調べた梁晋衡（2012）は，青年期を研究する際にアイデンティティの発達はやがて重要な鍵であるが，日本でも，中国でも，留学生を対象にしたアイデンティティの研究はまだ少ないことに着目した。また留学生を対象に研究する際に，主に異文化適応の視点から，留学生のソーシャルスキルやソーシャルサポートの研究が行われているが，アイデンティティの形成についての研究が不足していることに着目した。そこで東京都内の日本語学校で学んでいる中国人留学生164名（男性84名，女性78名，不明2名；平均年齢21.76歳）に対して，2011年5月から6月に自我同一性地位判別尺度（加藤，1983），目標意識尺度（都筑，1999），

異文化適応尺度から構成される質問紙調査を実施した結果、目標意識の各下位尺度のいずれにおいても、同一性地位による違いがあることが明らかになった(梁晋衡2012)。具体的には将来への希望、将来目標の有無、時間管理、計画性、将来目標の渴望において、達成地位群の得点が最も高く、拡散地位群の得点が最も低かった。空虚感においては、達成群の得点が低く、拡散群の得点が高かった。結果を要約すると、梁晋衡(2012)の研究では、アイデンティティ達成群の留学生の割合は先行研究より多かったが、アイデンティティ達成をしている人ほど、時間的展望をもっていた。さらに、異文化適応ができていた。一方で、モラトリアム群は心理的・身体的なネガティブな反応が激しかった。

これらの結果を踏まえれば、日本後語学校に在籍している中国人留学生は外国人である以上、異文化がもたらす負担を背負わなければならない。つまり、日本に留学しようと思っている学生達は、カルチャーショックという避けることのできない異文化ストレス問題を解決する必要がある。しかし日本での滞在期間が長くなるほど異文化に慣れてはいくが、来日して日本語学校へ在籍している最初の時期は、異文化に適応することは難しいことであると考えられる。

この問題を解決するためには、どのように異文化に適応するのか学習プロセスについて明らかにする必要がある。さらに、異文化適応の問題とは別に留学生の大部分を占めている中国人留学生を対象とした研究により明らかにされたもう一つの問題がある。それは、日本語学校には、青年期の学生が多く、アイデンティティの形成についての問題も抱えているということである。そこで、日本語学校にいる中国人留学生に対して、異文化適応をして行く中でアイデンティティの形成に関して支援する機関を設けることで彼らは、カルチャーショックを克服しやすくできるのではないかと考える。

### 3. 来日1年目とそれ以降の異文化適応プロセス

近年では、外国人留学生の日本における異文化接触時のストレス、不適応に対する積極的な姿勢、対処への視点を持った研究がなされるようになって来ているが、例えば留学生の自己効力感の高さなど、留学後の適応に影響を及ぼす個人差要因もみられる(早矢仕, 1996)。井上・伊藤(1997)は留学生の来日一年目の文化受容態度と精神的健康について着目した。この研究では、Berry(1980)の文化受容態度の分類に基づき、留学生を同化、分離、統合、周辺化の四つの文化受容態度に分類している。具体的に説明すると、同化とは異文化接触事態におかれた個人がその相手国の文化や社会との交渉を求め、元の自国の文化やアイデンティティの維持を望まないといった態度、分離とは自分自身の文化に価値を置いて相手国の社会や文化との総合作用を避ける道を選択したといった態度、総合とは自分の文化の保持をすることと、相手国の文化・人々との日常の交渉の双方を追及するというような態度、周辺化とは自国の文化的アイデンティティの保持にも関心がなく、相手社会・文化との関係の保持

にも関心がほとんどないといった態度である。その中でも一番適応が良いのは、統合的文化受容態度の学生であることを指摘している（井上・伊藤，1997）。早矢仕（1996）は、それと類似の指摘をしており、同化主義者、自文化主義者、積極的折衷主義者、消極的折衷主義者のうち、積極的折衷主義者の留学生の異文化適応が良いことを指摘している。同様に、日本側からのサポートがあることによって、“統合”的文化受容態度が形成され、保持される可能性があることを示唆している（井上・伊藤，1997）。また留学生の文化受容態度と精神的健康との間には関連があるが、留学直後の1か月後と6か月後よりも、1年後以降に精神的健康に影響を与えているという。長期的に考えると、文化受容態度と留学中の精神的健康は相互に影響しあう関係性が示唆された。来日一か月後と六ヵ月後にはその関係性が認められなかったが、一年後に明確になることが示された。来日してからの1年間とそれ以降を継続して、在日留学生の個人差要因と精神的健康を調べる研究は重要であると考えられる。

さらに滞在期間が長くなった場合にも問題はある。謝（2014）の研究で、滞在期間一年半以上の学生は滞在期間約三か月の学生より「疲労感」、「自己不明瞭」における無気力感得点が有意に高いという結果が得られた。時間の経過に伴い理想と現実の格差に気づき、疲れを感じ、無気力感を強く感じるようになると推測できる（謝，2014）。

これらの先行研究から、異文化に接するには同じ外国人でも異なる態度を持っており、それらの異なる態度により、異文化適応の程度も異なっている、特に、時間に伴い自分が最初に持っている態度が変わっていく可能性があるということが分かった。ここで、もし研究により明らかにされた一番適応の良い学生が持っている統合的態度に注目しながら、最初に在籍する日本語学校が学生を支援すれば、異文化適応を促進するだろう。

#### 4. 日本語学校に在籍する留学生の問題

異文化適応の初期段階にいる日本語学校の留学生は、大学や大学院に在籍している留学生と比べ、来日後の期間が短く、日本語能力も高くないため、日本社会での生活面で非常に困難な状況に遭遇している。しかし、日本の留学生受け入れの体制では、日本語学校に在籍している留学生への支援がほとんど行われていないことが現状である（梁恵，2014）。さらに、日本語学校に在籍している中国人留学生に対しては、2年以内で進学か就職をしなければならないという規制があり、このプレッシャーが異文化ストレスを増幅している。

中国人留学生および就学生の精神保健について、ベック抑うつ検査（Beck Depression Inventory：BDI）を用いて比較研究を行った村瀬ら（1996）の研究を紹介する。この研究が実施された時期は、在日外国人が増え始め、精神保健にも次第に関心が向けられつつあり、留学生、就学生、研修生として滞在している在日外国人の約2/3を中国人が占めていた時期である。村瀬ら（1996）は、三重大学の中国人留学生（78人）と三重県内の日本語学校二校の中国人就学生（100人）を対象に調査を行った。調査協力者は、三重県在住の中国人



留学生の約7割であった。中国語訳BDIによる自記式問診表を使用し、全く症状のない0から重篤な3までの4段階で評定し、各項目の合計点数のカットオフ値は、10点で、具体的には10～18点が軽度、19～29点が中等度、30～63点が重度と判断した。調査の結果、抑うつ状態と判断された者の割合が中国人就学生は28.9%である一方で、中国人留学生は23.9%であった。抑うつ状態の出現率には有意な差は認められなかったものの、BDIの平均合計点数では、中国人就学生は7.9点で、中国人留学生の5.4点より有意に高かった。さらに年齢と滞在期間をマッチさせるために、30歳以下の者だけを対象にして平均合計点数を比較した、さらに滞在6ヵ月未満の者だけを対象にして両者の平均合計点数を比較した。その結果、両者とも就学生の方が有意に高かったが、性差はなかった(村瀬ら,1996)。結果を要約すると、就学生は留学生より抑うつ傾向を示していた。この背景として、1992年から1993年の調査当時は、不法滞在者が多く、それ以外の大多数の就学生は、無事に進学できるかどうか最大の関心事であり、それが精神的に不安定に陥らせる一要因となったと考えられる。留学生という安定した身分を得ることができれば、在日中国人集団にとって、日本社会は、基本的にあまり異質とは映らないかもしれない。これに対して、就学生はまだ留学生としての身分の保証がないために、精神的により強くストレスを示していると考えられる。

梁恵(2014)は、社会環境ストレスに焦点を当て日本語学校に在籍する中国人留学生のストレスとメンタルヘルスを調査している。この調査では、大学、大学院に在籍している留学生と比べ、適応状況がより悪いと考えられている日本語学校に在籍している留学生を対象とした。調査結果によると、日本語学校に在籍する中国人留学生用のストレスサ－の尺度紙を開発し、「日本語コミュニケーションストレス」、「社会環境ストレス」、「進路ストレス」の3因子が抽出された。来日期間の長い日本語学校生は、来日期間の短い日本語学校生と比べて「社会環境ストレス」をよく体験していた。また、「日本語コミュニケーションストレス」と「進路ストレス」には有意差はなかった。

そこで、筆者らは中国人留学生達が抱える問題の中に、村瀬ら(1996)が明らかにした90年代の中国人留学生の抑うつ問題は、今現在も中国人留学生の間にあるのではないかと考えた。また、中国経済の発展につれ、日本の中国人留学生が増えていく中で、社会環境、言語、人間関係など抑うつを誘発するストレスに関連している要因を考慮した上で、また文化受容態度などの個人差要因を踏まえた上で、改めて調査する必要があると考えている。

## 5. 在日中国人留学生の支援に関する問題

周玉慧・深田(2011)は、「在日中国系留学生の心身の健康に及ぼすストレスサ－とサポートの影響：17年間に変化したのか」というタイトルで、質問紙調査による研究を行った。この調査の目的は、在日中国人留学生が日本での生活、勉学において受け取るソーシャルサポートの特徴を明らかにすることにあつた。調査対象は、日本の大学に在籍している中

国人留学生681名である。調査内容は対象者の特性、生活ストレス度、ソーシャルサポートの項目であった。調査の結果、サポートを「得た」と回答する学生が70%を超えた項目数は、「研究領域」9項目中6項目、「人間関係領域」6項目中2項目、「情緒領域」6項目中3項目であった。大学に所属する留学生は、「研究領域」でのサポートを最も良く得ていた。また女性、あるいは親友のいる留学生がソーシャルサポートを多く得ていた。なお、必要と感じて得られたソーシャルサポートの割合と生活ストレスとの間に負の相関が見られ、留学生は必要なソーシャルサポートが得られることがストレス軽減に役立つことが示唆された。

「中国人留学生の勉学・生活におけるソーシャルサポートの特徴とその効果」というタイトルの研究では、在日中国系留学生の心身の健康に影響を及ぼすストレスと受け取ったサポートの干渉効果を1993年と2010年のデータで比較検討している（陳金娣・高田谷，2008）。調査対象は、1993年が175人、2010年が246人の在日中国系留学生であった。その結果、情緒的サポートと生活的サポートは17年間の間に増加したが、勉学的サポートと助言的サポートあるいは精神的健康と身体的健康には変化が見られなかった。

村瀬ら（1996）や梁恵（2014）の調査によると、中国人留学生において、就学生は、留学生よりも有意に高い抑うつ状態が認められた。残念なことに、これらの問題に対し、日本語学校に在籍している中国人留学生への支援が行われていないのが現状である。

以上から、日本に来たばかりの留学生たちが多数在籍している日本語学校における、留学生たちへの異文化適応の問題に関わる支援が非常に重要だと考えられる。日本語学校に在籍する中国人留学生のストレスの種類の比較研究と支援の現状の分析を通し、さらに検討し明らかにすることが重要と考えられる。具体的には、日本語学校に在籍する中国人留学生のストレス（梁恵，2014）と抑うつ症状や大学生精神的健康を測定するためには、20国以上で用いられている尺度SCL-90-R（井上・伊藤，1997）、留学生の個人差要因としての文化受容態度、及び日本語学校側のサポートとの関係を検討し、明らかにすることが必要である。日本語学校に、心理相談室設置の有無、ソーシャルサポートの種類別に、それらの必要性の有無について検討する研究を行うことを今後の研究課題とする。

## 引用文献：（アルファベット順）

Berry, J.W. (1980) Acculturation as varieties of adaptation. In A. Padilla (Ed.),

*Acculturation: Theory, models and some new findings*. Boulder, CO: Westview. Pp. 9-25.

陳金娣・高田谷久美子(2008) 在日中国人留学生の勉学・生活におけるソーシャルサポートの特徴とその効果 山梨大学看護学会誌, 6巻, 2号, 17-24.

早矢仕彩子 (1996) 外国人学生の日本社会での適応感 *Bulletin of the School of Education, Nagoya University* (Education Psychology, Vol. 43, 147-162).

稲村博 (1980) 日本人の海外不適応 日本放送出版社

- 伊藤武彦・井上孝代（1998）全国高等教育機関の留学生相談の実態調査第1報告井上孝代  
留学生の中途退学に関する異文化間心理学的研究 平成8年度・9年度科学研究費補助金  
（基礎研究 C）研究成果報告書, 6-38.
- 井上孝代・伊藤武彦(1997)学生の来日一年目の文化受容態度と精神的健康  
The Japanese Journal of Psychology, Vol.68, No.4,298-304.
- Kuo, W.H. (1976) .Theories of migration and mental health: An empirical testing on  
Chinese American. *Social Science and Medicine*, 172 (8) ,449-457.
- 加藤厚（1983）大学生における諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.
- 梁恵（2014）日本語学校に在籍する中国人留学生のストレスとメンタルヘルス —社会環境  
ストレスに焦点を当てて — *Rikkyo Clinical Psychology Research* ,Vol. 8, 33-44.
- 梁晋衡（2012）異文化体験におけるアイデンティティの形成—日本語学校で学ぶ中国留学生  
を対象— 日本青年心理学会大会発表論文集(20), 24-25.
- 村瀬さな子・村瀬澄夫・北畠正義・山内徹（1996）. 中国人留学生及び就学生の精神保健  
Beck Depression Inventory による比較調査 日本公衆衛生雑誌, 43 (5), 398-402.
- 松本基子（1999）誰がになう私の介護 外国人研修生・技能実習生に関する一考察 社会福祉  
論集, 2, 45-54.
- 日本学生支援機構(2017) 平成29年度 外国人留学生在籍状況調査結果  
[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_e/2017/\\_icsFiles/  
afieldfile/2018/02/23/data17.pdf](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2017/_icsFiles/afieldfile/2018/02/23/data17.pdf)
- 日本語教育振興学会 (2017) 日本語教育機関の調査・統計データ  
<http://www.nisshinkyo.org/article/pdf/overview05.pdf>
- 小此木啓吾 (1978) 『モラトリアム人間の時代』中央公論社
- 都筑学（1999）大学生の時間的展望—構造モデルの心理学的検討— 中央大学出版部
- 謝延瓊（2014）日本語学校における中国人留学生の異文化ストレスと無気力感に関する  
研究 *Kyushu University psychological research*, 15, pp. 53-61.
- 周玉慧・深田博己（2011）在日中国系留学生の心身の健康に及ぼすストレスとサポート  
の影響：17年間に变化したのか,留学生教育学会, 第16号, 2011.12 p.1-12



# **Intercultural adaptation with Chinese students at a Japanese language school**

DING, Siqu  
MATSUDA, Eiko

## **Abstract**

The number of Chinese students studying in Japan has increased. On the other hand, the supports for Chinese international students to adapt to Japanese culture have not been enough. There were many cases that international students cannot overcome the culture shock in the early days of Japan.

Although it is easy to receive various support if international students belong to universities, the support plan of the Japanese language school is relatively unstable and insufficient. In the survey of Murase et al. (1996), Chinese students who were in Japanese language schools were significantly higher in depression than in Chinese university students.

In view of this background, this paper examined the researches on the intercultural adaptation for the Chinese student studying in Japan, and discussed with a viewpoint of mentalhealth in Chinese students belonging to Japanese language schools.

**Keywords** : Japanese language school, intercultural adaptation, intercultural stress, Chinese international students, depression, social support